
ファンタジーな世界に飛ばされて ～～クラス全員みんなで来ちゃいましたー～～

野々村イチゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジーな世界に飛ばされて
クラス全員みんなであ
ちやいましたー

【Z-17】

N
7
4
2
8
Y

【作者名】

野々村イチゴ

【あらすじ】

剣と魔法が行き交う世界にとばされてしまった

とある中学校の3年C組の生徒

魔法や剣なんて夢のような世界だ

なんて言ってる場合じゃない

ここにはお金を稼いでくれる父や

家事をこなしてくれる母などはいないのだ。

生き延びるためには自らお金をかせぐしかない！！

とある者は剣をとり魔物を葬る冒険者ギルドに入り

とある者は兵士に志願したり

とある者はとりあえず町のパン屋で働いたり。

これは少年少女たちが自立して生き延びようとする物語である

序章 プロローグ

オッス！オラ 中山ヒロキ

なぐんか 知らねーけど

変な世界に來ちまつたんだ

みたところ小さな村のようだよ

來ている服も中世の外国みたいな布の服。

よくわかんねーけどよお

ワクワクすつぞー！

プロローグ 旅立ち

「くそー修学旅行のバスはどこだ？、おくれちまうんじゃないのかあ？！」

俺は中山ヒロキ

どこにでもいる普通の中学生

強いて違ふところをあげるとすれば

異性が少し苦手ってことかなー

かなり急ぎ気味に大型バスの駐車場を走る

するとクラス全員がのりこんでいるバスをみつけた。

俺は遅刻をバレないように乗り込んでいる列にわりこんだ。「ふー。危ない危ないっ」と

無事バスにのりこめた

バスの中にドンピシャ乗り込みりゃあ先生バレやしないだろう。

僕はさっそく眠ろうとした、会話はない。
たまたま一人席だったのだ。

「みなさん注目してくださいーい」

かわいらしい声がバス内のスピーカーから響いてくる。

ふとみるとバスガイドさんがマイク片手に笑顔をふりまいている。

（ウホッ！ いい女…。）

「今日はみなさんに悲しいお知らせがあります、泣かないでくださいね」

イイ女だが、なんだこのノリ？

誰か修学旅行というイベントを休むのか？

「このバスに本来乗るはずの先生が風邪を引いておやすみになっちゃいました」

「ヒヤッホー！！！！」

「IEYYYYEEEEEEA！！！！！！！！」
「ハッハッハッハッハッハ」

クラス中に歓喜の声があがる。

先生という法律が無くなったことで
お菓子をたべまくったり
ゲームをしたり

とにかくバスの中は学生にとっては夢の無法地帯となる。

「まっ先生がいなくてもバスは出発しちゃいます。

それではしゅっぱーっ しんこー」

なんやかんやで総勢30人の乗せたバスは京都に向けて出発した。

ファンタジーな世界に飛ばされて

〓〓クラス全員みんなで来ちゃいましたー

小説家のタマゴ！

になれたでしょうか？

色いろ感想や意見をいただけたらうれしいです。

ファンタジーな世界に飛ばされて

くくクラス全員みんなで来ちゃいましたー

さて、俺は改めて寝るとしようか。

昨日の晩。

ワクワクしすぎて眠れなかったとは口がさけても言えねえぜ。

つと。ゆっくり昼寝をしようとしたらミラー越しに運転手がこっちみてるじゃねえか。

目があってしまった

「やらないか」

「結構です」

俺は異性がちょっと苦手なっけで立派なノンケだからな。

まあこのオッサンは要注意だな。

100%こいつはノンケだってかまわねえで食っちまうやろっだろう。

俺はそそくさと眠りについた。

くく30分後くく

「ふわあくく」

よく眠ったな。

バスの揺れを感じないとなるともう着いたのかな？

「目を覚ましたかね」

ん？

聞いたことのない老人らしき声がする
あれ？ここはどこだ？

どうやら俺はベッドに寝かされてるらしい。
しかもなぜか昔の洋風の部屋の中で
着ている物も違うのに気がついた。
制服ではなくいつのまにか中世の外国のような服だ。

「君たちは多分記憶がないだろうけど話しておくとするよ」

記憶がない？何の話だ？
っていうかこの目の前の老人は
どうみても外国の人なのに俺たちと同じ言葉をしゃべりやがる。
いったいどうなってんだ？

「あのう、ここはどこですか」

多分言葉が同じなら通じるだろうと言ってみる

「そうだね、君は記憶を無くしてからずっと今まで気絶していたからねえ」

気絶？俺はバスの中で眠りについただけだが？

この老人の言ってることはまったくわからん。

「まずここはどこかだね、

ここはガルガンダシア中立共和国の城の救護室さ」

「ガルガ……何？」

「ガルガンダシア中立共和国」

ガルガンダシア共和国だと？

そんなところ世界地図にのっていたか？

「あの・・・俺の記憶がないってのは、いったいなんなんですか？」

国のことも気になるがとりあえず
記憶がないだの言っている老人にきく。

「ああ、この世界のこと全てわかんないんだっけ、そりゃあ記憶が
無いんだもんな。」

くどいですジジイ

いいから説明しやがれ。

「いいかい？君たちはソフィアの光をまともに浴びたんだよ。」

ソフィアの光？

またよう分からん単語が出てきた。

「ソフィアの光とは100年に一度、天からきまぐれに射してくる光のことさ。」

この光を浴びると、浴びた者は記憶を無くし、どこか違う地域にワープしてしまう。」

俺にはしっかりと記憶が残っているがな。

「しかし、実は悪いことばかりでは無いんだよ。」

ソフィアの光を浴びた者は普通の人間以上の力を発揮できる。

つまり、大人三人を子供一人で軽くのしちゃうことができるみたいな」

ほほうつまり俺はスーパーマン？

けど大人三人って武術に精通したものなら余裕なんじゃないかな？

「まあ所詮人間だからね、村を壊滅させるほどの力はないよ。」

「それとこの世界の説明もしとつか、どうせ忘れたんだろ？」

だから元々この世界なんてしらねーよ。

「この世界の通貨はガル。」

そして稼ぐ方法はまあ働くだね。」

ガルかいったいここはどここの国だ。

「そして働く方法だけど、君は若いからギルドに……」

「先生、彼には自分から説明します。」

「おお！君はケンタ君じゃないか！、

そうかそうか、いやー15人に同じ説明をするのは飽きてしまっ

なあ、じゃよろしく頼むよ」

そう言つて先生とよばれたジジイは部屋を後にした。

「ケンタ？」

「ようひロキい、元気か？」

なんかちよつぱり《じいじ》みたいな雰囲気をする背の高い少年小沢ケンタがやってきた

無論、同じバスに乗っていたクラスメイトだ。

「元気か？つて元気は元気だけど
いつたいここはなんなんだい？」

わけのわからんジジイに聞くより早いだろう。

ケンタはうれしそうに説明を始めた

「なんなんだつて？そりゃあここは異世界だよ！？」

……ハイ？

「すごいよこの世界！だつて魔法使いとかいるよ！
あと剣士とかモンスターとかもいるんだつて！」

理解ができない、アレ修学旅行は？

ケンタはさぞうれしそうに説明をした。

どうやら異世界というのは本当らしい、そして自分だけ一週間も目

を覚まさなかったこと（寝てたからか？）

一番最初に目覚めたのがコイツだったこと、環境適応能力が高くてたすかったぜ。

それと俺を含めてクラスメイトはこの城に15人しかいなかったこと。

城の中庭に裸同然で倒れてたそうなの。

国王が保護してくれてた事

他のヤツらは自由気ままにこの城で過ごしていること。

だが

「国王はとてもいい人だけど
この国は貧乏だから15人も養っていけないんだって」
つまり俺らには働けってことか。

「だけど冒険者ギルドの寮に入れてくれるって！
一週間後にみんな冒険者ギルドに登録するんだ！」

俺らに戦いの技術なんかないぞ？

「だからみんな誰かに戦闘の技術を習ってるよ。
ホラ！あそこでケインズ兵長に槍の手ほどきを受けてるでしょ！」

ケンタの指した方向、広い中庭で槍をふるっているクラスメイトが見える。

ケインズ兵長と呼ばれた体格のがつしりとしたオッサンは
熱心に槍の訓練をしている。

「ちなみにケンタは何をうけてんの？」

のんびり屋のコイツのことが気になった。

こいつは虫をころさないほど優しい性格なのだ、いったい何をする
のだろうか？

「前平コーキといっしょにプリーストと軽めの剣の稽古だよ。」

プリースト 僧侶的なポジションか、
ってことは魔法がつかえんのか？

「魔法・・・使える？」

「もちろん！ちよこつとかけてあげるよ！、」
そついうと彼は俺に手をかざし

「クラシオン！」

そつ言い放つと俺の体に青い光が舞い散る。
すごく気持ちいいが

「俺いま怪我してないねんけど」

「アハハハ、つかえたんだからいいじゃん！」

俺もいくつか、魔法をつかってみたい。
俺はこの世界にドキドキしてきた。

ファンタジーな世界に飛ばされて

〃〃クラス全員みんなで来ちゃいました！

子供みたいな文章力ですみません

これから努力していくのでどうかよろしく！

あと魔法名とかのアドバイスや技の名前を募集しちゃいます

特徴と名前を書いて感想に！

どうかよろしく

この世界での生活3日目（前書き）

登場する人

小林ケイタ マジックフェンサー（魔法剣士）

特徴 ロリ顔の美少年 小柄 どちらかというと剣より魔法。

ミリア ガルガンダシア魔導士 25歳 女

この世界での生活3日目

俺はこの世界にやってきて

この世界の事を色々知ることができた。

この世界には冒険者のためのギルドがあちこちの町や城下町にあることを知った。

冒険者とは剣や魔法で獰猛な生物を狩り

それを仕事にしている者である。

まっ平たく言うと賞金稼ぎみたいなもんか。

この世界では多くの若者が冒険者にあこがれるが、命の危険と、戦いという重労働に耐えられなくなり、挫折してしまう者も少なくは無いという。

そういえば俺らのクラスは総勢30人。

なのにガルガンダシアに滞在していたのは半分の15人

多分、同じバスの中にいたんだ、この世界にいることな間違いないだろうが

さすがに心配だなあ。

まっ そんな心配をしている暇があつたら覚えられるだけ魔法を覚えたいな。

俺は今クラスメイトの小林ケイタと一緒に

ミリアさんに魔法のレクチャーを受けている。

ミリアさんは、お城の魔導士部隊の女性にして凄腕の隊長さんだ。

隊長みずから訓練を行ってくれるのは。

やさしいガルガンダシア国王のはからいと。

ミリアさんのご厚意だそうだ。

ちなみに俺の職業（仮）は

マジックフェンサー

つまり魔法剣士だ。

俺一応元剣道部だったし

魔法と剣を同時に使えたら良いなと思った。

しかしこの職業。

小林とかぶってしまったが

どうも小林のほうに魔法が上手のような気がする。

まあ俺には剣術もあるからいいや。

「フロストゲイル……！」

うっは！

小林が氷の広範囲の魔法を唱えながった。

さ、さみ……

「スマンスマン、中山」

ショートボブで小柄な少年が平謝りをする。
顔は少年寄りの少女といったところだ。

いわゆるシヨタ

小さいくせして危ない魔法をガンガンためすその勇氣。

俺にはできねえ、完敗だぜ。

その様子をミリアさんがほほえましく見守る。

お母さんみたいだな。

・・・いや・・・違うな・・・

ミリアさんが、小林を見る目はそれとは違う。

あっ！ 分かったゾ！

あれは愛する人を見る目だ！

つまりミリアさんは小林くんLOVEのフラグをたてている。

ミリアさん、シヨタコン少年溺愛主義
だったなんて……

俺は心の中でミリアさんを応援した。

あの小林を落とすのは難しいぞ。

なんていったって純粹（多分）な少年だからな。

ちなみに俺は魔法剣の特訓中だ。

魔法剣とは剣に魔法を纏わせて戦うマジックフェンサー特有の技術。

簡単にすると剣に炎をまとわせて

どこかのゲームさながらに斬撃をくり出せる。

魔法や魔法剣で華麗に戦闘を導いていく。

カッコよくないっすか？

元剣道部のかいあって、剣の扱いにはなれていて。

すぐショートソードの扱いにも慣れた。

剣になれているのかこの3日で覚えた魔法剣は3つ

一つ、『バーンブレイド』

炎の斬撃。うん。

魔法剣の基本中の基本。

そのため熟練の魔法剣士のこの技は威力がすさまじいらしい。

二つ、『エアロサイズ』

剣に魔力を込めながら、おもっきり、切り払う。

ヒュバツ！

つと、真空の刃が剣の軌道から放たれる。

かなりに使いやすいが威力はそこそこ。

だが十分殺傷能力はあると思う。

ちなみにこの技は剣を使用しなくても放てる『サイズ』という魔法があるが。

剣技のほうは技の威力が若干強い。

三つ、『ワールウィンド』

覚えてたての広範囲風魔法。

小型の竜巻お起こして攻撃するのだあ！

どうやら俺には風の魔法が向いているようだな。

そついや、なんでこの世界でこんなに早く魔法をつかえたんだ？
体の中に不思議な力、魔力というのか？
があるのが分かる。

なぜ自分でも理解できているのか分からない。

やつぱり、あの『ソフィアの光』を浴びたからなのか？
（俺はバスの中で寝ていたし、クラスメイトに聞いても覚えていないという。）

まっ、使えるだけラッキーなのかな？

今日も多分訓練で一日を過ごすだろうな。

明日にでもクラスメイトが何しているか見に行ってみるか。

この世界での生活3日目（後書き）

どうでしたか？

マジックフェンサー（仮）
という名の魔法剣士。

次は多分魔導士系の職業をだしたいと思います。

なにか職業や技の名前でアドバイスをいたたければと思います。

どうぞ次回もよろしく！

この世界での生活7日目（前書き）

今回は男子全員書いてみました！

なかなかイメージがわかりませんね。

しかも名前もありふれた名前で申し訳ありません

一人一人個性的？な感じ

今後はヒロキ以外一人一人の視点で書くかもです。

〵〵職業紹介〵〵

マジックフェンサー（魔法剣士）

ガーディアンナイト

アークメイジ

プリースト

ライトブレイバー

サムライ

ウィザード

この世界での生活7日目

今日で城での訓練は終わり。

つまりギルドに登録しろってこったあ。

これから自分で金を稼いで

自分で飯を喰らう。

王様はいつでも城に来いと、皆の前で言っていた。

この2週間（俺は1週間寝てた）で王様はみんなの父親みたいな存在になっていた。

城下町にとどまるというのに涙を流していたのだ。
（おいおい…）

ミリア師匠はいつでも訓練においでよと言っていた。
（小林に特に強く）

いつでもクラスメイト15人は

顔パスで城に出入りできるようになった。

さて、今俺はギルドにやってきている。

が、クラスメイトの女子6人のうち4人がいない。

どうやら女子には戦いは向いていないようだ。

一人はパン屋に住み込みで働いて。

一人は町の薬草園（おそらく元園芸部だろう）

アレ？もう二人は何処か？

「一人は酒場でウェイターとして。

もう一人は魔法錬金術を城で勉強してるよ」

答えてくれたのは

親友のミナミ、女じゃないよ男だよ。

決して『たっちゃん、甲子園に連れてってね』
なんていう美少女ではない

「やあ、ミナミさん。ごきげんよう」（甘ったるい声）

「おはよ。」

つつこみ無しかよ！

これじゃあコレが普通になっちゃうだろ！！

みなみは「?」といったかんじでこっちをみてる。

「さあ〜て私ヒロキのファッションチェック」

「へっ?」

「今日のコーディネートはばっちりですねみなみさん」

「……………」(みなみは様子をつかがっている。)

「このキツネの付け耳ですか?似合ってますの〜」

ふざけているのか分らんが、頭にのっかっているソレが気になる。

「……………コレ本物」

「ハイ?」

「コレ本物なんだよ」

「いやいやいや」

人間にそんなものあるかいな!!

「」

「実はシツポもあるんだ」

ヒョイツ　と後ろを見せてくる

なんか……

黄色いフサフサがついてますけど

いったいどういう……

「こつちの世界にきたときからあつたの」

「あつたのじゃないでしょ！

このお婆か！！」

クラスメイトが大変なことに……

確かに剣と魔法の世界では、猫耳少女とか
ドラゴンのハーフとか

いるよ！

けどお前は元々人間じゃん！

こつちの住民じゃないじゃん！

「いったい……どうしたというのだ……」

「……似合つでしょ」

あつ。　うれしいんだ……

うん。よく映えていると思うよ……

〃〃ギルド内〃〃

「登録ありがとうございました、お部屋は向かいの建物の611室になります。」

お食事は一階のコルトおじさんの食堂、または六階にあるバーでお召し上がれますよ。」

「おお、どうも。」

ようやく部屋に入れるな。

思ってたよりギルドの建物は大きく、寮もまたかなり大きい。

しかもBARつきやぞ！

この世界には未成年の飲酒は禁じられていない。
さっそくクラスメイトの一人が行ってしまった。

「今日はまだ午前中だしなさっそく依頼かなんかこなしてみるか。」
そう思った俺は剣を腰にさし部屋をあとにした。

まず向かうはギルドの受付に

「全速前進DA！」

〃〃ギルド内部〃〃

さっそく簡単な依頼はっと。

おろ？クラスメイト男子が集まっておるぞ？

「ねえミナミ、いったい何の相談？」

「おっ丁度ヒロキもきたことだし、さっそくやらないか？」

「だからなんだってばあ」

「賞金が大きい依頼、みんなでやろって話」

そっという事か！

みんなちゃんと武装してる。

準備はo kなのか。

「ヒヤッハー 俺の血が騒いでるぜ」

テンションが高いのは小暮マサキ。

黒いマントを羽織っている。

武器は先端に琥珀色の石が埋め込んである漆黒の杖。

どうやら彼はアークメイジなそうだ。

「ボチボチやるかのう」

じいじ（ケンタ）とコーキ
二人はプリーストな方々は

じいじは白のマントにメイス（剣はどうした？）

コーキは蒼の服にレイピアという軽装。

「（モグモグ）つぶはあー。うめえな！ここのメシ！」

あそこでメシを喰らっているのが、つってアレ？

あいつさっきBARに行ったはずじゃあ？

しかも鎧着てるし……

奴は一応紹介しておく

カズキ 遊び人兼ガーディアンナイト

うんゴリラなおまえにはピッタリだゾ 軽鎧に、槍か。

でミナミはというと

短剣と曲刀の2刀流

彼はライトブレイバー

圧倒的な手数で敵を翻弄する。

一人丸腰の奴を発見した

「そんな装備で大丈夫か？」

「ん〜？大丈夫だよお」

と言って蒼紫のローブの内側から本をとりだした

「コレあるし」

本でどうやって戦うの君？

だめだこれはだめだ、うん

見なかった事にしよう。

「ヒロキ初めての仕事たのしみだなあ！オレ、ワクワクしてきた。」

大振りの刀を腰にさしたサムライが話かけてきた。

彼はユースケ。同じ元剣道部だ。 あっ！カズキもか。

何故この世界にサムライがあるんだろうか？

そこは気にしないのに限るな。

にしてもやっぱりサムライか。さすが剣道部副部長。

だがこの世界だとう見ても浮いた存在だな。

なんか、こう、何かが違う。

サマーライみたいな。

三度笠にブーツ。白い袴に青の胸あて。

縞合羽だったら確実にシン。

小林「みんなそろった事だし、さっさとしゅっぱつしちゃいましょう！」

このメンバー、大丈夫かな？

多分…大丈夫だ問題ない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7428y/>

ファンタジーな世界に飛ばされて ～～クラス全員みんなで来ちゃいました

2011年11月24日19時54分発行